

教育研究業績書

2017年10月20日

所属：看護学科

資格：准教授

氏名：池田 七衣

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	アレルギー、周手術期看護学、QOL、ストレス、看護教育学
学位	最終学歴
看護学博士、保健学修士	大阪大学医学系研究科保健学専攻博士後期過程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 院生への副指導教員としての指導（武庫川女子大学）	2015年4月～現在	平成27年度修士課程に在籍する1名に対し、副指導教員として取り組む研究に関連する論文レビュー、計画書立案に向けての相談など、実現可能な研究計画の立案に向けて、指導を行っている。調査段階においては、初めて調査を実施する大学院生がその実践方法をイメージできるよう、模擬インタビューを行い指導するなど工夫している。平成28年度は、修士課程に在籍する計2名に対して、同様の指導を行っている。両名とも社会人であることから、仕事と学業の両立という困難に対する相談へも積極的にに関わり、学生個々の事情を鑑みての具体的なアドバイスを心がけている。
2. 学部生への講義（知っておきたい救急処置・武庫川女子大学）	2015年4月～現在	一般教養科目である本科目は、内容を、一般の生活者である我々が、いざというときにどのように動けばよいのか、という視点で筋を通し、医学・看護学の知識が全くない学生が興味を持ちやすいよう、心がけている。具体的には、講義中は専門用語を用いず、救急時の対応も、生活環境の中にある道具を用いて対応できるよう提案し、実践形式での演習を積極的に導入している。
3. 院生への講義（生涯発達看護学特論B・武庫川女子大学大学院）	2015年4月～現在	修士課程に在籍する学生に対し、当該授業の一部を担当し、自身の研究活動にて得た知識や経験を教授している。具体的には、ストレスに関する研究の歴史や動向、測定方法などの一般的知識に加え、周手術期の患者におけるストレスについて、自身の研究内容を紹介しながら考察し、今後の研究の発展可能性を学生と議論している。
4. 院生への相談役割	2010年4月～現在	自身が博士後期課程にて在籍していた大阪大学大学院では、同じ研究室に属する博士前期課程の学生および学部学生の研究指導を実施、計画書作成から調査方法、論文執筆に至るまでの相談を受け指導していた。
5. ビデオ撮影を導入した演習	2010年4月～2015年3月	成人看護学の演習においては、気管内吸引をはじめとした複数の技術修得を目指した演習が運営されるが、いずれも学生にとっては修得が難しい技術である。そこで、学生それぞれの手元を中心にビデオ撮影を行い、演習後に自身の実践の様子を視聴（自身の技術のみを視聴）させ、再度演習にて実践の機会を与えた。ビデオ視聴により、客観的に自身のことを評価でき、上手にできた部分、上手にできなかった部分を明確に把握することができ、再実践に際しては、より具体的に改善すべきところを理解して望むことができたと考えている。
6. 実習時の学生対応(前任校)	2010年4月～2015年3月	病棟実習中は、毎日必ず担当学生全員と一人ずつ話をする時間を設け、学生の実習の進捗に合わせた実習指導、精神的フォローを行った。また、目標の達成状況や学生の様子について、積極的に臨床側の学生指導スタッフとコンタクトをとり調整するよう心掛けていた。
7. 看護技術の自己学習システムの整備(前任校)	2010年4月～2015年3月	実習において学生が看護技術面での不安を軽減することができるよう、学習の時間帯や使用するベッド・物品等のブックイングをスムーズに調整できるような自己学習システムを導入した。強制させずに自分に足りていない技術の自己学習をさせることは自己の客観視と主体的な学習姿勢への促しにもなったと考える。
8. 演習における工夫(前任校)	2010年4月～2015年3月	演習では、模擬患者を導入し、術後急性期の事例をもとに、術後の観察のイメージができるよう、酸素投与や中枢・末梢ルートや膀胱留置カテーテルなど事例に見合った各種ドレーンを患者役に留置。それぞれの排液に見合った色付けをした排液を準備、術後の倦怠感を患者役が演技するなどして、できる限り実際の術後場面に近い状態を作りだし、学生が術後をイメージすることを助けた。
9. 学部生 卒業研究指導(前任校)	2010年4月～2015年3月	看護研究においては、基本的には週に1度ゼミの時間を確保し抄読会を開き、研究倫理、文献の読み方や研究への活かし方についてレクチャーした上で、学生が研究計画書の作成から論文の作成に至るまでの一連の流れを理解・実施できるよう促した。また、国家試験対策として、一年間の勉強のペース作りを目的とした勉強の進度カレンダーを作成し、予定通り進んでいるかの確認、また、強みや弱みに合わせた具体的な勉強方法の指導を行って

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
10. 院生への実験方法の相談役割	2008年4月～現在	いた。 学士及び修士論文にて細菌を取り扱った実験研究を行っていた。この知識や技術を生かし、大阪大学医学部保健学科および大阪大学大学院において、学生のそれぞれの研究テーマに合わせた実験計画や実験方法について月に1回程度で相談を受けて、アドバイスしている。また、細菌実験の初心者には、基本的な実験技術の助言も行っている。
2 作成した教科書、教材		
1. 知っておきたい救急処置での配布資料作成（武庫川女子大学）	2015年4月～	一般教養科目という特徴に合わせ、専門用語を用いず、配布資料には図を多く挿入し、視覚的に理解に訴えられるよう、工夫している。
2. 成人看護学援助論演習の資料作成（前任校）	2010年4月～	講義資料としてスライドをそのまま配布するのではなく、レジュメ方式で講義の重要部分を穴埋め・記述できるようにすることで、学生が講義中によそ見をすることなく教壇に集中できるよう工夫するなどした。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 教務委員（前任校）	2013年4月～2014年3月	教務委員では、平成26年度の時間割の調整や、学生の単位修得状況の管理を行うとともに、単位未修得となり学年進行が不可能となっている学生の担任に対するの助言等を行った。
2. 実習委員（前任校）	2012年4月～2013年3月	実習委員では各領域の実習科目の統括を行うとともに、全領域共通科目として位置づけられていた早期体験実習や総合看護学実習の科目の企画に参加し、対象病院との調整、運営を行った。
3. クラス担任（前任校）	2011年4月～2014年3月	学生のクラス担任として、年最低2回（3or4月、9月）と、希望者には定例の面談に加えての個人面談を実施し、学生が1年生から4年生を卒業するまで、生活や学業面、進路決定などに対して学年進行に合わせたフォローアップを行った。
4. 学生委員（前任校）	2010年4月～2012年3月	学生委員を通して、学生の大学生活についての管理・助言を行った。また、オープンキャンパスにおける看護学部内での企画や出務の調整や就職に関連した病院説明会の企画運営に参加した。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 保健師免許証	2003年5月	登録番号 第115583号
2. 看護師免許証	2003年3月	登録番号 第1239763号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 病棟管理職を交えた意見交換会	2010年4月～	看護基礎教育の場への転職をきっかけに、それまでの臨床現場で関わった方々との関係を継続し、臨床の師長職・副師長職・病棟/外来看護師ら数名を交えたメンバーで、2ヶ月に1度程度の情報交換会を行っている。新人看護師等の教育に対する意見交換などの機会にもなっており、立場を超えての率直な意見を交換することで、現任教育の場と基礎教育の場の理想と現実について情報交換し、学生への関わりへ還元することができている。
2. 院内ACLSインストラクター役割	2010年4月～2014年3月	病院内におけるACLSインストラクターの資格を取得し、月に1度、職種を超えて実施されていた院内のACLS講習会においてインストラクターとして参加し、BLS、ACLSの知識と技術を広めることに努めていた。
3. 新人看護師へのプリセプター役割	2007年4月～2010年3月	看護師3年目より新人看護師一人を担当するプリセプター役割を担った。新人看護師が病棟で初めて働く中での様々な疑問や困難を教育面及び精神面からサポートした。具体的には、1カ月に1度は必ず個人面談の時間をとり、新人ナースの訴えを傾聴するとともに、日常困っている場面では適宜アドバイスを加え、また、技術面での教育も、勉強会（移動介助や吸引方法、BLSなど）を実施するなどして技術向上へ導いた。
4. 所属病棟での看護研究の相談役割	2007年4月～2010年3月	所属部署において3年目以上看護師の教育上の課題であった看護研究への取り組みについて、自身が修士課程を修了した上での病棟配属だったことを受け、相談役割を担った。具体的には、看護研究に取り組むナースに対し、研究計画の書き方や、実践方法、報告書の書き方の相談など、適宜アドバイスを行っていた。
4 その他		
1. 日本看護研究学会 奨励賞 受賞	2009年8月	「頭髪に付着した院内感染原因菌の生残にシャンプー洗

職務上の実績に関する事項				
事項	年月日	概要		
4 その他				
		髪が与える影響」日本看護研究学会雑誌, 29(5), p. 19-25, 2007. に対し、奨励賞を受賞した。		
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 膵臓外科手術患者の周手術期における不安・痛み・唾液アミラーゼ活性の検討	単	2015年9月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 学位論文 (博士)	術前から術後1週間に抱えているストレスを、複数の評価指標を用いて主観的・客観的に明らかにすることを目的とした研究である。対象は膵臓外科手術を受けた29名であった。調査は、それぞれの対象者に対して、術前、術後1日目、術後3日目、術後5日目、術後7日目の計5回実施した。評価に用いた指標は、STAI、痛みのVAS、唾液アミラーゼ活性である。周手術期患者のストレスの変遷を主観的・客観的に結果で示すことができたことにより、看護ケアの根拠として対象理解に役立てられると考える。また、結果にある数字の変化を患者に情報提供することで、患者は、術後の苦痛の変化を事前に知ることができ、不安の軽減に繋がると考える。
2. 感染症の媒体としての頭髮(修士論文)	単	2005年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻 学位論文 (修士)	院内感染の主な原因菌である黄色ブドウ球菌及び緑膿菌の頭髮への接着状況と、水洗およびシャンプーによる洗浄について検討した。付着した黄色ブドウ球菌は洗浄により、徐々に頭髮からはずれるが、約7%頭髮に残存することが明らかになった。3H標識した細菌も同程度付着するが、シャンプーを加えても、なお頭髮上に残存した。さらに、大腸菌においては、シャンプーを加えて洗浄した後も、生存し、栄養を与えるると増殖が可能であることが明らかになった。
3 学術論文				
1. Perioperative Anxiety, Pain, and Salivary Amylase in Patients undergoing Pancreatic Surgery (査読付)	共	2016年5月	International Journal of Psychological Studies 7(2) p. 206-213 2015	術前から術後1週間に抱えているストレスを、複数の評価指標を用いて主観的・客観的に明らかにすることを目的とした研究である。対象は膵臓外科手術を受けた29名。調査は、それぞれの対象者に対して、術前、術後1日目、術後3日目、術後5日目、術後7日目の計5回実施した。評価に用いた指標は、STAI痛みのVAS、唾液アミラーゼ活性である。研究の結果、STAIについては、各調査時点の間に、有意な差はみられなかった。VASは、術後1日目に著明に高く、以後は徐々に低下した。術前と術後1日目、術後3日目、術後5日目、術後7日目にはそれぞれの間に有意差があった。唾液アミラーゼ活性について、術後3日目が最も高かったが、いずれの時点の間にも、有意な差はなかった。腹腔鏡手術群と開腹手術群の2群に分けて比較したところ、STAIではいずれの調査時点においても有意差はなかった。VASは、術後1日目は、両群間はほぼ変わらない値であった。3日目以降は、いずれの調査時点においても腹腔鏡群に比して開腹群が高い傾向があり、特に術後7日目には有意に高かった。唾液アミラーゼ活性については、いずれの調査時点でも開腹群の方が腹腔鏡群より値が高い傾向があった。
2. 看護系大学における気管内吸引演習の授業内容の検討・改善への取り組み(査読付)	共	2015年3月	日本看護学会論文集 看護教育, 45, p11-14, 2015.	授業改善を評価し、今後の授業運営を考察することを目的とし、成人看護援助論演習で気管内吸引演習を実施した2012年度と2013年度の学生を対象とし、演習後に、舟島らの「授業過程評価スケール-看護技術演習用-」(による授業評価を行った。また、吸引モデル人形を用いた吸引操作の様子を、各学生の手元に焦点を充ててビデオ撮影を行い、本人に視聴させ、視聴前後に「吸引手技自己評価尺度」(21項目、5段階自己評定)を用いて比較した。授業評価について、「時間配分と内容の難易度」、「意義・目的の伝達と指導・アドバイス」に関する項目が上昇した。ビデオ視聴前後の自己評価については、「患者に説明し了承を得る」「吸引後の手指消毒」「吸引効果の確認」など6項目が自己評価の低い項目であった。
3. 漸進的筋弛緩法による多発性硬化	共	2014年3月	摂南大学看護学研究 2	多発性硬化症病者の事例を通してPMRを行うことによ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
症病者の疲労への効果と課題—4名への2週間の介入を試みた事例研究—(査読付)			(1), 23-31, 2014.	る疲労への影響、およびPMR実施上の課題を、主観的側面、生理学的、生化学的側面から考察することである。調査への同意を得た4名に対して、PMRのCDを用いて、対象者が自宅で1日1回、2週間の介入を実施した。実施開始後1、7、14日目の3時点で主観的疲労を問うVisual Analogue Scale (VAS)、SF-8、気分プロフィール検査 (Profile of Mood: POMS短縮版、以下POMS) を測定した。そして唾液を採取し、分泌型免疫グロブリンA (S-IgA)、コルチゾール濃度を測定した。結果、MS病者はPMRを通して、血圧や脈拍、S-IgAが低下し、リラクゼーション反応を認める場合があった。ただし、今回は4名の対象者が2週間実施した事例研究である。対象者数は少なく、実施期間も短い。また、結果は主に開始時点と終了時点と比較して考察したため、途中でデータの上昇や下降もあった。対象者数の増加や長期間の介入、および対照群の設定などを行うことで一般化を目指す必要があることが示唆された。 共著者名：森谷利香、池田七衣 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析
4. アロマテラピーによる看護実践に関する文献レビュー (査読付)	共	2014年2月	アロマテラピー学雑誌 14(1), 58-60, 2014.	文献レビューを通してアロマテラピーに関する看護実践、および研究の実態を把握することを目的に研究を行った。対象文献は49件である。研究方法について、「前実験的研究」がもっとも多く、対象者数は約20名、介入期間は1日が多かった。実践については「リラックスできない・ストレス」に対するものが最も多く、その方法は「手浴・足浴」「マッサージ」が多かった。精油の種類は、ラベンダーとオレンジスイートが最も多く使用されていたが、精油情報を正しく記載していた文献は6件に留まった。看護師は症状の発生機序に応じたアロマテラピーの方法を選択していた。同時に、発生機序が明らかでない症状についてもアロマテラピーを用いてのケアを行っていたことが明らかとなった。 共著者名：森谷利香、池田七衣 本人担当部分：研究計画、データ収集、分析
5. 看護基礎教育に関わる教員および実習指導者の意識(査読付)	共	2014年12月	千里金蘭大学紀要11, 35-47, 2014.	看護基礎教育において協働する大学と実習施設の双方向からの実習指導を通じた看護教育への意識を調査し、臨床実習での学生をどのように捉え、どのように教育を行っているのかを明らかにすることを目的とした。分析対象は、A大学看護学部専任教員10名とA大学看護学部の実習の一部を受け入れている実習施設において、学生指導を担当している看護師52名である。自作の自記式アンケート調査を実施した。「どのような看護師になってほしい」と思って教育していますか」「最近の学生の特徴をどのように捉えていますか」「講義・実習にて指導している中で意識していることはどのようなことですか」等の質問内容であった。回答の内容を質的帰納的方法で分析した結果、教育の方向性に大きな違いはなく、それぞれに学生の様子および特徴を捉え、教育において学生を尊重している様子が伺えた。 共著者名：池田七衣、新井祐恵、富澤理恵、田中京子、山中純瑚 本人担当部分：調査全般、論文まとめを担当
6. 青年期アレルギー性鼻炎患者の実態調査からみえた疾患の特徴(査読付)	共	2013年4月	耳鼻咽喉科免疫アレルギー 31(1), 1-6, 2013.	どのような因子が青年期アレルギー性疾患の遷延に影響するかを調べることを目的に、大学生および開業医に通院中の青年期のアレルギー性鼻炎に対してアンケート調査を行った。アンケート内容は、年齢、性別、アレルギー疾患の現病・既往の有無、それらの発症時期と症状消失時期、家族歴、アレルギー症状による日常生活への影響度合いについてのVASである。分析対象となったのは、一般大学生233名とアレルギー性鼻炎患者95名。データより、アレルギー性鼻炎は大学生、通院患者を問わず小学校高学年が好発年齢であり、発症すると完治することは難しく、その症状が日常生活に与える影響は大きいことが示唆された。 共著者名：池田七衣、山中純瑚、津田菜穂子、鈴木宏史、萩野敏 本人担当部分：質問紙作成、データ分析、論文のまとめを担当
7. A pilot study of the effect of progressive muscle relaxation on fatigue specific to multiple sclerosis(査読付)	共	2013年3月	British Journal of Neuroscience Nursing 9(1), 185-191, 2013.	研究の目的は、4名の多発性硬化症(MS)病者に対する3か月間の漸進的筋弛緩法 (PMR) の実施から、疲労への影響、および実施における課題を考察することである。評価項目は、主観的疲労感(VAS)、QOL (SF-8)、気分 (POMS) で、開始後1日、7日、14日、1か月、2か月、3か月に測定した。また、気付いた事を日誌に記入してもらった。結果、VASの低下や疲労改善の記述があり、PMRはMS病者の疲労に影響すること

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
8. 上級生模擬患者による看護学生の学び(査読付)	共	2013年12月	千里金蘭大学紀要 10, 85-93, 2013.	<p>が示唆された。これに関連して、精神的QOLの向上や気分の安定等も認められた。さらに、事例はPMRによって自分の体に向き合い、疲労を予測・コントロールする様子があった。一方で、身体的QOLが低下することがあり、継続の困難さや、実施による感覚異常などを検討する必要性が示された。</p> <p>共著者名：森谷利香、池田七衣 本人担当部分：研究計画、データのまとめ</p> <p>本研究は、看護学部上級生(4年生)による模擬患者(SP)を活用した成人看護学演習において、受講した同学部3年生106名を対象に、この演習による「学び」に焦点を当てて調査を実施し、成人看護学演習の教育方法について示唆を得ることを目的としている。自記式質問紙調査の結果、得た「学び」についての回答を、質的帰納的に分析した。結果、44のコード、25のサブカテゴリー、および「準備の大切さ」「目的・根拠を考えたケア」「患者に適した看護のありよう」「患者への配慮」「看護の現実味」の5つのカテゴリーが生成された。上級生SPは、臨地実習の経験から下級生へのフィードバックができていたことから、演習への導入にはより効果的であったことが示唆された。</p> <p>共著者名：新井祐恵、北尾良太、池田七衣、中本明世、山中純瑚、竹村節子 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。</p>
9. 看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究(査読付)	共	2011年12月	千里金蘭大学紀要 8, 191-199, 2011.	<p>研究の目的は、模擬患者との演習を通して、看護系大学生の学習意欲およびコミュニケーション能力の変化を明らかにする、これら以外の模擬患者との演習を通じた学生の学びを明らかにすることである。領域別実習前の3回生81名に対して、模擬患者による演習の前後に質問紙調査を実施した。演習前の看護系大学生は、看護師の仕事の内容に関連する学習意欲が低く、また相手の背景に踏みこんだコミュニケーションへの自己評価が低い実態が明らかとなった。そして、模擬患者による演習によって、学習そのものへの意欲、看護師へのあこがれが増していた。その反面コミュニケーション能力に対して自己評価が下がっていたが、これは自らを客観視していると考えられた。</p> <p>共著者名：森谷利香、九津見雅美、池田七衣、竹村節子 本人担当部分：調査研究全般</p>
10. 頭髮に付着した院内感染原因菌の生残にシャンプー洗髪が与える影響(査読付)	共	2007年1月	日本看護研究学会雑誌 29(5), 19-25, 2007.	<p>シャンプーで洗髪した頭髮への、院内感染で重要な位置を占める黄色ブドウ球菌、緑膿菌、大腸菌の付着性について調べた。その結果、黄色ブドウ球菌は、種々のシャンプー剤により殺菌されるが、緑膿菌や大腸菌は全く殺菌されないことも明らかになった。多くの緑膿菌株や大腸菌株は、シャンプー洗髪しても一部が生きたまま付着し続け、再び増殖することから、頭髮が院内感染における感染源および伝搬経路となる可能性を強く示唆した。</p> <p>共著者名：池田七衣、白井文恵、土肥義胤 本人担当部分：企画・調査実施とまとめ</p>
11. Webサイトによる花粉飛散情報の提供とアクセス数及び患者動態(査読付)	共	2005年5月	日本アレルギー学会雑誌 54(5), 25-30, 2005.	<p>花粉症患者数は増加傾向にあるが、医療機関を受診せず市販薬ですませてしまう患者も多い。患者動態を把握するにあたり、医療機関だけの調査では不十分と考え、患者が比較的利用しやすいWebサイトを用いその実態についてアンケート調査を行った。2003年2月1日から4月30日、B製薬会社のWebサイトによるアンケート調査を行なった。花粉飛散数とアクセス数の相関、花粉症情報収集源、初期治療につき検討した。Webへのアクセス数は348,045件、アンケートに回答した患者は1,612名であったアクセス数と花粉飛散実測値には有意な正の相関がみられた。年齢、地域などが受診状況に影響を与えることが認められた。近年パソコンの普及率も急速に広がり、今後さらにインターネットからの情報提供は重要性を増す。情報提供者には信頼性の高いWebサイトの製作が求められる。</p> <p>共著者名：池田七衣、門田亜矢、荻野敏 本人担当部分：データ収集、論文まとめを担当</p>
12. Distinctive Bacteria-binding Property of Cloth Material (査読付)	共	2004年2月	American J. Infection Control 32(2), 27-32, 2004.	<p>院内感染の原因と考えられる細菌が伝播される媒体の一つと考えられる着衣について、その素材による差異を明らかにすることを目的とした。衣服繊維各種への黄色ブドウ球菌及び緑膿菌の接着率を調べた。アクリル、ポリエステル繊維が双方の約98%の細菌を接着するのに、ナイロン、木綿繊維は全く接着しないことを発見した。素材によって細菌の接着率に大きな差がみとめられたことから、細菌の伝播を阻止するためには、衣服素材にナイロン、及び木綿を</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				用いることが適当であることを証明した。 共著者名：M.Takashima、F.ShiraiM.Sageshima、N.Ikeda、Y.Okamoto、Y.Dohi 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. アクティブラーニングを意識した授業運営後の看護系大学1年生の社会人基礎力の現状	共	2016年8月	第42回日本看護研究学会学術集会 39(3), p. 223, 2016.	アクティブラーニングを意識して展開した成人看護学概論を受講した学生らの社会人基礎力に関連する力の現状を把握することが目的である。1年生後期科目の成人看護学概論において、2回の課題を出し、グループワークと発表を行い一連の講義終了後にアンケート調査を実施。分析対象は、59名。質的帰納的に分析した。学生が成長したと感じた項目は、4カテゴリー『多くの意見を理解しまとめる経験』『深く考え知識を深めた実感』等、不足を感じている項目は、3カテゴリー『相手を理解しチームをまとめるために必要なこと』『積極的に発信・挑戦すること』等が生成された。授業運営においてグループワークを導入し、対人交流の機会を提供することは、学生の思考・社会性・積極性について経験となり内省の効果期待できると考える。 共同発表者：藤本かおり、池田七衣、平野方子、宮嶋正子 本人担当部分：研究全般
2. 胃切除を受けた患者の社会復帰に向けた目標及びその達成率と自己効力感の関連	共	2016年8月	第42回日本看護研究学会学術集会 39(3), p. 276, 2016.	胃切除を受けた患者の社会復帰に向けた目標及びその達成状況と自己効力感の関係を明らかにすることを目的とした。調査は1回目は退院前、2回目は術後約3か月目の外来受診時に半構成的面接法と自記式質問紙にて行った。1回目の調査では社会復帰に向けて現在考えている目標について、いつ、何を、どの程度できるようになりたいと考えているか質問をした。2回目は、立てていた目標の達成率を聞いた。分析は、挙げられた目標を食事、運動など内容ごとに分類し、目標の個数と内容、達成率といった目標に関連する項目とSEACの関係はSpearmanの順位相関係数をみた。対象は51名。結果より、胃切除患者の自己効力感向上には社会復帰に向けて達成可能な近接目標を少数たて、そこに向けた近接目標を一つずつ達成していくことが重要と考えられた。 共同発表者：鈴木宏昌、池田七衣、富澤理恵、梅下浩司 本人担当部分：研究全般
3. Change in pain and stress levels of pancreatic surgery patients until 2 weeks postoperatively	共	2016年3月	第19回EAFONS in Chiba (East Asian Forum of Nursing Scholars)	膵臓外科手術を受けた患者の術後2週間以内に患者が抱える痛みとストレスの変化を明らかにし、術式による違いを踏まえて考察することが目的である。内容は、術前・術後3・5・7・14日目に、痛みのVAS、唾液アミラーゼ活性を測定した。結果、唾液アミラーゼ活性は術後3日目に最も値が高く、開腹術群は、腹腔鏡群より経過を通して高かった。痛みのVASは、術後1日目にピークがあった。経過を通して、開腹群は腹腔鏡群より値が高く、術後の経過日数に従いその差は広がる傾向を見せ、開腹術の方が腹腔鏡下手術よりも痛みやストレスは大きいことが明らかとなった。VASと唾液アミラーゼ活性は緩い正の相関関係にあり、唾液アミラーゼ活性が客観的な痛みの指標ともなりうる可能性が示唆された。 共同発表者：Nanae Ikeda, Rie Tomizawa, Rika Moriya, Junko Yamanaka, Hiroyoshi Suzuki, Koji Umeshta 本人担当部分：研究全般、発表を担当
4. 成人看護学演習において模擬患者 (Simulated Patient) を演じる上級生のリフレクション	共	2015年8月22日	日本看護研究学会学術集会 38(3), p. 149, 2015.	成人看護学演習において上級生が模擬患者 (SP) を演じた経験からリフレクションについて考察することが目的である。平成27年度 3年生対象の成人看護援助論演習でSPを演じた18名の4年生(上級生)に対して、SPを演じて感じたことや、自らの看護についてグループインタビューを実施し、質的帰納的に分析した。結果、「実感した患者の心情」「下級生の動きに向けられた上級生としての視線」「思い至った患者のためにある看護の大切さ」「実感した看護職者としての自分」の4つのコアカテゴリーを見出した。上級生のSP経験は、内省や自己評価を行うなど、看護に対するリフレクションを促し、看護実践における知の探求につながり、看護の質を向上させる機会

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
5. 膵臓外科手術を受けた患者の術後2週間までの痛みとストレスの変化	共	2015年8月	日本看護研究学会学術集会 38(3), p. 191, 2015.	<p>になりうることが示唆された。 共同発表者：中本明世、池田七衣、新井祐恵、北尾良太、山中政子、森岡広美、山中純瑚 本人担当部分：共同研究により抽出不可能</p> <p>膵臓外科手術を受けた患者の術前から術後2週間にかけての痛みとストレスの変化を明らかにし、両者の関係を術式による違いを踏まえて考察することが目的である。対象は、20歳以上の29名。内容は、術前・術後3・5・7・14日目に、痛みのVAS、唾液アミラーゼ活性を測定した。結果、唾液アミラーゼ活性は、術後3日目に最も値が高く、開腹術群は、腹腔鏡群より経過を通して高い値であった。痛みのVASは、術後1日目にピークがあり、開腹群は、腹腔鏡群より値が高く、術後の経過日数に従いその差は広がる傾向を見せた。よって、開腹術の方が腹腔鏡下手術よりも痛みやストレスは大きいことが明らかとなり、両手術の痛みとストレスの軽減の経過を数値で示すことができた。VASと唾液アミラーゼ活性は正の相関関係にあった。 共同発表者：池田七衣、富澤理恵、森谷利香、山中純瑚、鈴木宏昌、梅下浩司 本人担当部分：研究全般、発表を担当</p>
6. 胃切除を受ける患者の術後3ヶ月以内の自己効力感に影響する身体症状の特徴	共	2015年8月	日本看護研究学会学術集会 38(3), p. 192, 2015.	<p>胃切除を受けた患者の術後3ヶ月目までの自己効力感に影響する身体症状の特徴を明らかにすることが目的である。A病院で胃切除術を受けた患者50名を対象に、退院前、術後1ヶ月目、術後3ヶ月目の外来時に調査を行った。調査内容は自己効力感尺度と上部消化管術後機能障害評価尺度である。調査の結果、自己効力感に影響のあった症状は、退院前には「ダンピング様障害」、術後1ヶ月目には「嚥下障害」「活動力低下障害」、術後3ヶ月目には「活動力低下障害」が挙げられ、各時期で特徴がみられた。これらを踏まえた関わりが、自己効力感を高めるために重要と考えられた。 共同発表者：鈴木宏昌、池田七衣、富澤理恵、梅下浩司 本人担当部分：共同研究により抽出不可能</p>
7. 胃手術を受けた患者の退院時の自己効力感に関連する要員の検討	共	2015年6月27日	日本クリティカルケア看護学会誌 11(2), p. 238, 2015.	<p>胃手術を受けた患者の退院時の自己効力感に関連する要因を明らかにし、自己効力感を高める支援の示唆を得ることが目的である。胃切除患者55名を対象に、がん患者の病気に対する自己効力感尺度と、上部消化管術後機能障害尺度を使用した。調査の結果、「入院期間」や「身近な相談者、相談できる患者の有無」「看護師・医師への相談のしやすさの程度」「身の回りの支援者の数」と自己効力感との間に相関が認められた。 共同発表者：鈴木宏昌、池田七衣、富澤理恵、梅下浩司 本人担当部分：共同研究により、抽出不可能</p>
8. Perceptions of teachers in the education of nursing college students	共	2015年2月5日	#18 EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) 2015 in Taipei	<p>大学教員に対して、看護学生への教育的関わりへの意識を調査分析し、現状を把握することを目的とした。分析対象は、看護学部専任教員。「講義・演習実習にて指導している中で意識していることはどのようなことですか」の項目についての自由記載を質的帰納的に分析した。結果「学生を受け止めるというかわり」を意識している様子や、「自身を客観視できるように」関わっていた。教員間もしくは臨地実習における指導者と連携して有効な教育方法を見つけ出すことの有用性が示唆された。 本人担当部分：研究全般にて抽出不可能 共同発表者：Rie Tomizawa, Nanae Ikeda, Sachie Arai, Junko Yamanaka</p>
9. Factor Analysis of Nursing Students' Learning Featureing Senior Students Acting as Simulated Patients	共	2015年2月5日	#18 EAFONS (East Asian Forum of Nursing Scholars) 2015 in Taipei	<p>上級生模擬患者(SP)演習における看護学生の学びに関する因子構造を明らかにすることを目的とした。内容は、学びの内容について研究者間で検討した32項目4件法。主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を実施。分析対象は3年生54名。第1因子はα値0.88「根拠や目的のある計画的な看護実践に向けた新たな気づき」7項目、第2因子はα値0.893「看護に対する考えの深まり」4項目、第3因子はα値0.864「看護ケアを行うための準備を整える大切さ」5項目。SP演習は感情をゆすぶられ、学習意欲の変化、SPのフィードバックが患者側にたった考えを促すとされており、実際の患者への援助を具体的にイメージ化させ、自己の課題に気づかせる機会となった</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
10. Patient anxiety crresponde wit h S-IgA levels over the corse of pancreatic surgery	共	2015年2月5 日	#18 EAFONS (East Asia n Forum of Nursing S cholars)2015 in Taipe i	共同発表者：Sachie Arai, Akiyo Nakamoto, Ryota Kitao, Nanae Ikeda, Junko Yamanaka, Setsuko Tak emura 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
11. 成人看護学急性期実習の看護学生 の自己評価からみえた実習目標と 課題の検討	共	2015年12月	第35回日本看護科学学 会学術集会講演集 p. 538, 2015.	SIgA濃度およびSTAIを用いて臓腑外科手術を受ける 患者の周手術期の不安の変遷について考察すること を目的とした。手術前に1回目、術後3、14日目の計 3回実施した。26名を分析対象とした。結果、1回目 から2回目にかけて値が上昇し、2回目から3回目にか けて低下する者が多いという傾向は、術前より術後3 日目にストレスが上昇し、その後術後2週間経過する 頃には低下していくという一連の過程を示唆するこ とができた。患者のストレスが術後3日目の時期増大 していることを念頭に温かい働きかけが必要である ことが考えられた。 共同発表者：Nanae Ikeda, Rie Tomizawa, Hiroyosh i Suzuki, Rika Moriya, Junko Yamanaka, Koji Ume shita 本人担当部分：研究全般、発表を担当
12. Changes in pain and feelings of patients undergoing pancrea tic surgery until 3 days after Surgery	共	2015年10月	ENDA & WANS 2015 in H annover (European Nu rse Directors Associa tion & World Academy of Nursing Science)	成人看護学急性期実習後の学生の自己評価からみた 実習の現状把握および、急性期実習目標の検討を行 うことを目的とした。対象は、A看護系大学にて平成 25年10月～平成26年12月に急性期実習を終了した看 護学生53名。自己評価表の一部である、「実習に対 する目標」と「自己の振り返り」を質的帰納的に分 析した。結果、目標の内容は、振り返りの中でも同 様に抽出されていることが分かった。振り返りでは 、学生が実習前に目標を挙げたときには予想しな かった「グループ」としての相互作用と成長を自覚し ている様子や、自身を客観的にみて今後への課題も 抽出されていた。実習の振り返りを記述させるこ とは、成人看護学実習の目標の1つである看護過程に 関する評価に留まらず、自己の内面の成長を自覚す る機会になっていると考えられた。 共同発表者：新井祐恵、池田七衣 本人担当分：研究全般
13. Relation between Self-educatio n Power of Nursing Students and Self-assessment of Learning Activities in School Practice	共	2015年10月	ENDA & WANS 2015 in H annover (European Nu rse Directors Associa tion & World Academy of Nursing Science)	臓腑外科患者の、術前・術後1日目、術後3日目にお ける痛みと意思の経過を明らかにすることを目的と した。対象26名。調査内容は、痛みについてのVASと 、「今気になること、思い」についてを質的帰納的 に分析した。結果より、術後1日目の痛みを強く感じ る患者は、術後3日目も痛みを強く感じる傾向があり 、術後1日目をピークに、痛みは軽減している様子 があった。意思の分析から、術前は術後経過が予測 できないことによる不安があること、術後1日目は、痛 みを中心とした思いと、手術が終わった安堵感が混 在していること、術後3日目は、現状だけでなく先 を見越して思考している様子や、自身以外の事柄にも 目を向けることができていた。 共同発表者：Nanae Ikeda, Rie Tomizawa, Rika Mor iya, Junko Yamanaka, Hiroyoshi Suzuki, Masako Miyajima, M. Hirano, Kaori Fujimoto, Koji Ume shita 本人担当分：研究全般、発表を担当
14. Effect of Allrgic Rhinitis on Self-management and QOL of Adu lts Asthmatic Patients	共	2014年9月7 日	European Respiratory Society 2014 in Munich	看護技術演習時の自己教育力と学習活動における自 己評価の関係を明らかにすることを目的とした。対 象とした看護技術は、2年生対象の口腔内吸引である 。調査項目は、西村らによる看護学生のための自己 教育力尺度、宮下らの学習活動自己評価尺度である 。対象52名。結果、自己教育力尺度において低い値 を示した項目である学習技術や基本は、演習内の学 習行動と関係を示した。学習行動そのものも高い値 を示さなかった。自己評価能力も高い値を示さず、 苦手としている様子が見られた。これらより、学生 は、学生自身で学習活動に臨み、その過程を評価す ることについて、自立できていないことが示唆され 、学習の対象がどのようなものであっても同様の結 果が現れる可能性が考察できた。 共同発表者：Rie Tomizawa, Nanae Ikeda, Sachie A rai, Ryo Kitao, Junko Kondo 本人担当分：共同研究につき、抽出不可能

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
15. 看護系大学における気管内吸引演習の授業内容の検討・改善への取り組み	共	2014年9月7日	第45回日本看護学会看護教育 学術集会抄録集 p. 170, 2014.	は44.8%、鼻症状がある患者は75.5%。自己管理行動については、十分な睡眠・ストレスをためないの2項目に2群間に有意な差があった。QOLの全ての低位尺度において、アレルギー性鼻炎合併群はスコアが高く、感情面・経済的因子で有意にQOLが低かった。「精神的要因で症状を悪化させる」と感じている様子があった。アレルギー性鼻炎合併群はストレス対処が消極的であり、感情面のQOLに影響を及ぼしていた。 共同発表者：Junko Yamanaka, Nanae Ikeda, Satoshi Ogino, Hiroshi Fujiwara, Chiko Okada 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
16. 看護系大学生の教育に関わる教員の意識	共	2014年8月27日	日本看護学教育学会誌 第24回学術集会講演集 p. 204, 2014.	「気管内吸引」について、2012年度から2013年度にかけて、技術に対する学生の自己評価と演習運営方法を調査し、演習方法改善への考察につなげることを目的とした。対象は、3年生前期科目である「気管内吸引」の演習後のアンケートの回答を得られた2012年度43名、2013年度42名。2012年から2013年への演習内容の改善点は、技術の手順の見直し、演習資料・デモンストレーションの改善、学生一人当たりの演習時間の延長、ビデオ視聴による客観的な技術の自己評価である。調査は、舟島らの授業過程評価スケール看護技術演習用一、技術の手順各々について「できた～できなかった」までの5件法である。ビデオ視聴を導入することで、各手順について、客観的に技術の自己評価を行うことができていた。 共同発表者：富澤理恵、池田七衣、北尾良太、新井祐恵 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
17. 上級生模擬患者(Simulated Patient)演習を導入した看護学生の学びに関する因子構造	共	2014年8月23日	第40回日本看護研究会 日本看護研究学会雑誌 37(3), p. 155, 2014.	大学教員の看護学生への教育的関わりへの意識を調査分析し、現状を把握することを目的とした。対象は、A大学看護学部所属する専任教員のうち、アンケートの回答を得られた10名。内容は、「どのような看護師になってほしいと思っ教育していますか」「講義・演習実習にて指導している中で意識していることはどのようなことですか」等。質的帰納的に分析した。幼さやコミュニケーション能力の低下が特徴として挙がる学生に、勉学への指導と共に看護師を目指す動機付けを意識した関わりといった人間性への関わりにも意識的に学生に関わっている様子があった。また、自分で考える力の低下、主体性の乏しさといった特徴をもつ学生に対して、臨床に繋がる基礎教育の場としての立ち位置を強く意識して関わっている様子が伺えた。 共同発表者：池田七衣、新井祐恵、富澤理恵、山中純瑚 本人担当部分：研究全般、発表を担当
18. 成人喘息患者の症状コントロールに影響を及ぼす要因の検討	共	2014年7月5日	第8回日本慢性看護学会 日本慢性看護学会誌 8(1), p. 95, 2014.	上級生模擬患者(SP)演習を導入することにより、臨床において必要とされる協働的姿勢の獲得やそれに伴う学習意欲の向上等の教育効果が期待できるものと考え、演習における看護学生の学びに関する因子構造を明らかにすることを目的とした。対象は3年生92名。内容は、上級生SP演習による学生の学び(2013)の調査結果(上級生模擬患者演習を通してどのように思いましたか?)から、質的帰納的に分析し抽出した44コードのうち、研究者間で検討を行い質問項目として採用した32項目4件法。主因子法、プロマックス回転による探索的因子分析を行った。上級生SP演習は、特に上級生自身の実習を通じた体験からの学びによって臨地実習での実際の患者への援助を具体的にイメージ化させ、自己の課題に気づかせる機会を与えたと考える。 共同発表者：新井祐恵、中本明代、北尾良太、池田七衣、山中純瑚、竹村節子 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
18. 成人喘息患者の症状コントロールに影響を及ぼす要因の検討	共	2014年7月5日	第8回日本慢性看護学会 日本慢性看護学会誌 8(1), p. 95, 2014.	成人喘息患者のQOL向上に向けた効果的な教育支援を目指し、症状コントロールに影響を及ぼす要因を明らかにすることを目的とした。内容は、基本属性、重症度を含む身体的因子、自己管理行動、喘息意識、性格特性、QOL(AHQ-33)。対象は、大阪府下の医療機関に通院中の成人喘息患者424名。結果、重症度別では、軽症群64.6%、中等症群24.1%、重症群9.2%。重症度別3群間の比較では、症状が重度になる程、自己管理行動を積極的に行っていた。QOLの分析では、喘息主症状・感情面・活動制限・増悪因子・社会活動制限・経済的側面の全下位尺度で有意差があり、中等症群、重症群は軽症群よりQOLが阻害されていた。喘息の症状コントロールには適切な自己管理行動かの見極めが重要で、コントロール状況の悪化に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
19. 膵臓手術患者における術前から術後にかけての不安過程の唾液内SIgAを用いた評価	共	2014年5月24日	第10回日本クリティカルケア看護学会 日本クリティカルケア看護学会誌 10(2), p. 230, 2014.	伴いQOLが低下していた。 共同発表者：山中純瑚、池田七衣、岡田知子、山本撰子 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 客観的ストレス指標である唾液内SIgA濃度および主観的不安尺度であるSTAIを用いて膵臓外科手術を受ける患者の周手術期の不安の変遷について考察することを目的とした。膵臓疾患患者を対象者に、手術前、術後3、14日目の計3回実施。内容は、自記式質問紙（STAI：状態不安）、唾液SIgA濃度の測定。分析対象26名。STAIの総合得点は、1回目が46.6、2回目が49.4、3回目が42.0。SIgA濃度は、1回目を1として、2回目が1.5倍、3回目が2.1倍であった。結果STAI、SIgAの両者において術前から術後にかけての不安の過程は患者により異なるが、1回目から2回目にかけて値が上昇し、2回目から3回目にかけて低下する者が多いという傾向は、術前より術後3日目にストレスが上昇し、その後術後2週間経過する頃には低下するという一連の過程を示唆することができた。 共同発表者：池田七衣、富澤理恵、山中純瑚、鈴木宏昌、梅下浩司 本人担当部分：研究全般、発表を担当
20. 看護技術に関する文献について：気管内吸引技術に着目して	共	2014年11月30日	第34回日本看護科学学会学術集会講演集 p. 694, 2014.	清潔操作と吸引技術という複合的な技術である気管内吸引技術に着目し、技術の根拠をどのように表記しているのか、学生が活用する教本を中心に内容を概観することを目的とした。対象は、気管内吸引技術関連文献を、教科書出版リストからハンドサーチにて抽出した49件の図書。呼称について、「気管吸引」、「気管内吸引」「一時的気道内吸引」等があった。手袋装着についてもばらつきがあった。文献によって異なる表記や手順の存在は、初学者である看護学生にとっては、混乱を招く可能性があると考えられた。一つ一つの手技の根拠が明確でない場合には、それらの点も説明に含め、技術操作の基本を表記することが教本作成において望まれた。 共同発表者：富澤理恵、池田七衣、北尾良太、新井祐恵 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
21. アロマセラピーに関する看護実践についての文献レビュー	共	2014年11月29日	第34回日本看護科学学会学術集会講演集 p. 37, 2014.	アロマセラピーに関する「看護実践」研究の動向を把握し、その方向性についての示唆を得ることを目的とした。対象は、医学中央雑誌Web版（Ver. 5）によって「アロマセラピー」でシソーラス検索を行い、過去5年間で看護に関する原著論文であり、ハンドサーチによって「実践」に関するものであった49件。実践に対する客観的評価指標は、血圧が最も多く、主観的指標は、感想が多かった。ラベンダーやオレンジスイート等のリフレッシュ系のオイルを用いたマッサージや手足浴といったケアが多く、末梢循環の改善や副交感神経への作用を目的としている様子が伺えた。実践の評価には、客観的指標と主観的指標が用いられていたが、一定の傾向は見受けられず、実践のデザインやその効果的的確な評価方法についても更なる研究が期待される。 共同発表者：森谷利香、池田七衣 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
22. 膵臓外科手術における術前から術後3日目にかけての患者の痛みと思い	共	2014年11月29日	第34回日本看護科学学会学術集会講演集 p. 30 4, 2014	膵臓外科患者の、術前・術後1、3日目における痛みと思いの経過を明らかにすることを目的とした。対象26名。内容は、痛みについてのVASと、「今気になること、思い」についての自由記載を質的帰納的に分析した。結果、痛みのVASは、術後1日目と術後3日目に有意な相関があった。「思い」は、術前は「手術がうまくいくかどうかの不安」等、術後1日目が「手術が終わった安心感」等、術後3日目は「他者への意識の移行」等。以上より、術後1日目の痛みを強く感じる患者は、術後3日目も痛みを強く感じる傾向があった。また、術前は術後経過が予測できないことによる不安が存在、術後1日目は、痛みを中心とした思いと手術が終わった安堵感の混在、術後3日目は、自身以外の事柄にも目を向けることができていた様子があった。 共同発表者：池田七衣、富澤理恵、森谷利香、山中純瑚、鈴木宏昌、梅下浩司 本人担当部分：研究全般、発表を担当
23. 社会復帰過程にある胃切除患者の身体症状と自己効力感の関連	共	2014年11月22日	第76回 臨床外科学会 日本臨床外科学会雑誌	社会復帰過程にある胃切除患者の術後機能障害による身体症状と自己効力感の関係を検討することを目的とした。対象は、胃切除患者49名。内容は、上部消化管術後機能障害評価尺度と、がん患者の病気に

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
24. 看護系大学における気管吸引演習に関する調査—第2報：看護学生へのアンケート調査による学習効果の実態—	共	2013年2月	75巻増刊p. 627, 2014. 環境感染誌 28(Suppl)p. 351, 2013.	対する自己効力感尺度である。術後の退院前に1回目、術後約3ヶ月後の外来時に2回目の計2回調査した。結果、機能障害尺度・自己効力感共に1回目より2回目有意に上昇していた。機能障害尺度の総得点中央値で症状不良群と症状良好群に分けると、良好群に比して不良群は機能障害尺度が1回目・2回目ともに有意に高く、自己効力感有意に低かった。これらから、術後3ヶ月目の自己効力感を高めるには、退院時の症状が不良であった症例に、特に着目して関与することが有用であると示唆された。 共同発表者：鈴木宏昌、梅下浩司、池田七衣、滝口修司、黒川幸典、高橋剛、森正樹、土岐祐一郎 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
25. 看護系大学における気管吸引演習に関する調査—第1報：清潔操作と学生による演習評価—	共	2013年2月	環境感染誌 28(Suppl)p. 345, 2013.	学生が考える清潔操作に関する意識や、清潔吸引に関する技術における困難なポイントを明らかにすることが目的である。看護学部3年生の「清潔吸引」の技術演習の前後にアンケートを実施。内容は、清潔吸引の手順23項目についての演習前後の印象である。分析対象45名。「挿管チューブから適切などころまで（カテーテル）を挿入する」を最も「難しそう」（95.3%）、最も「難しかった」（83.7%）と感じていた。また「吸引が必要であることが分かる」「カテーテルを10秒前後で引き上げる」「吸引の効果を確認する」等が「難しそう」・「難しかった」項目として挙げられた。学生が「難しそう」「難しかった」と感じている項目は「アセスメント」を要するポイントであり、観察点やその方向性を指導することが効果的な演習内容に必要であることが示唆された。 共同発表者：北尾良太、新井祐恵、池田七衣、富澤理恵 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
26. 成人喘息患者のアレルギー性鼻炎合併が自己管理行動、QOLに及ぼす影響	共	2013年11月	アレルギー 62(9-10), 1375, 2013	気管吸引技術は看護学生にとって経験や習得が困難であるといわれている。また吸引技術関連図書の清潔操作の記載は多様である。そこで、清潔操作手順を整理すること、気管吸引演習後に看護学生による授業過程評価から、演習効果を明らかにし、演習内容の検討を行うことを目的とした。看護学部3年生90名を対象とした演習後に、舟島らの授業過程評価スケール—看護技術演習用—を用いた質問紙調査を行った。分析対象図書は14件で、清潔操作の根拠はほぼ記載がなかった。質問紙調査において、有効回答は40。平均点の最も低かったものは、「1.時間配分と内容の難易度」であった。授業過程評価から、学生は演習過程を中等度に適切と評価しているが、学生の集中力に応じて時間配分や練習時間の確保する必要性が示唆された。 共同発表者：富澤理恵、池田七衣、新井祐恵、北尾良太 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
27. 模擬患者演習による看護系大学生の学びに関する研究（第1報：演習前の2集団の特徴）	共	2012年6月	日本看護研究学会雑誌 35(3), p. 256, 2012.	本研究ではアレルギー性鼻炎の合併の有無が喘息患者の自己管理行動、QOLに及ぼす影響について検討を行った。大阪府下の医療機関に通院中の喘息患者424名を対象に実施した、自己管理行動、AQH-33を含む質問紙調査の結果を、アレルギー性鼻炎の合併の有無の2群に分けて統計的に分析した。結果、自己管理行動では「十分な睡眠」「ストレスをためない」の2項目について有意差を認め、合併群は行動が消極的であった。また、QOLのすべての下位尺度について合併群はスコアが低く、「感情面」「経済的因子」において有意にQOLが障害されており、合併群はストレス対処が消極的であり感情面のQOLに影響を及ぼしていることが示唆された。 共同発表者：山中純瑚、池田七衣、荻野敏、藤原寛、岡田智子、山本攝子、源誠二郎 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
27. 模擬患者演習による看護系大学生の学びに関する研究（第1報：演習前の2集団の特徴）	共	2012年6月	日本看護研究学会雑誌 35(3), p. 256, 2012.	臨地実習開始前の看護学部3回生を対象とし、学習意欲とコミュニケーション能力向上を目的とした模擬患者（SP）を導入した演習を2010年（対象者80人）、2011年（対象者86人）に実施した。SP演習前のコミュニケーション能力と学習意欲について2つの集団の特徴および差異を明らかにすることを目的とした。調査項目は基本属性、コミュニケーション能力、学習意欲。コミュニケーション能力、学習意欲の平均得点は共に有意差はなかった。全般にあいさつ、視線を合わせるなど対象者への自己開示や会話時における態度、学習への意味を見出しているという項目に関する自己評価が高かったが、対象者の訴えを聞き出す項目が低かったため、この点を考慮した指導が必要と考えられた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
28. 模擬患者演習による看護系大学生の学びに関する研究（第3報：学習効果の質的分析）	共	2012年6月	日本看護研究学会雑誌 35(3), p. 257, 2012.	共同発表者：竹村節子、新井祐恵、池田七衣、九津見雅美、森谷利香 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 模擬患者演習時に実施した質問紙調査の自由記載部分から、学生の学びを帰納的に分析・考察し、今後の課題を明らかにした。2011年看護学部3年生86人を対象に、模擬患者を導入し、学習意欲・コミュニケーション能力の向上を目指した演習を行った。模擬患者は上級生が実施。質的帰納的方法を用いて5のカテゴリが生成された。それらは、『他者の存在を意識することによる自らの客観的認識』『即応力への希求とその方法の模索』『現状認識から生じる実習への不安』等。本演習目的に沿ったコミュニケーションについてのカテゴリが生成され、対象者へのケアと並行したコミュニケーションが思うようにいかないもどかしさを感じている様子や具体的な改善策を示した意見もあり、患者と関わる上で課題となっている様子があった。
29. 多発性硬化症病者の疲労に対する漸進的筋弛緩法の試み	共	2012年6月	日本慢性看護学会誌 6(1), p. 88, 2012.	共同発表者：池田七衣、森谷利香、新井祐恵、九津見雅美、竹村節子 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当 目的は、多発性硬化症(MS)病者が漸進的筋弛緩法(PMR)を実施することによる疲労への影響を明らかにすること、および実施上の課題を明らかにすることである。2011年7～9月に一人につき2週間、CDとパンフレットを用いて、16筋群をターゲットとしたPMRを実施した。評価項目として、疲労を問うVAS、SF-8、POMS、唾液分泌型Ig-A、唾液中コルチゾールを1、7、14日目に測定した。また、毎回の実施前後に血圧、脈拍を測定した。その他に、PMRに関連した出来事の日誌を書いてもらい、記述を分析対象とした。対象者は5名。EDSSの平均は2.7。結果、VASは低下。精神的QOL(MCS)は7日目、14日目、1日目の順に高かった。実施後は実施前に比べて脈拍が減少。日誌から「疲労の改善」や「活動量の増加」があった。PMRはMS病者の疲労に対して好影響を与えていると推察できる。
30. 模擬患者演習による看護系大学生の学びに関する研究（第2報：学習意欲とコミュニケーション能力）	共	2012年6月	日本看護研究学会雑誌 35(3), p. 257, 2012.	共同発表者：森谷利香、池田七衣 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 模擬患者(SP)演習前後の調査から、学習意欲およびコミュニケーション能力の変化を明らかにすることを目的とした。2011年看護学部3回生86人に質問紙調査(基本的属性、学習意欲、コミュニケーション能力)と180分のSP演習を実施した。SPは面識のない4回生。演習前後で有意差がみられた項目は、学習意欲では、「学習に非常に興味をわいてきた」「学習が難しすぎて理解できない(逆転)等。コミュニケーション能力は、「あいさつ、自己紹介、患者確認ができたか」「視線を合わせ、適切な姿勢・態度でいたか」等。演習前の学生は自己開示や会話時の態度ができていたと認識していたが、SP演習で不十分さに気づき、対象者の情報を聞き出すことができていないことを自覚し、コミュニケーションの難しさを学んだと考える。
31. SF-8を用いた大学生のQOL調査－アレルギー疾患合併による影響－	共	2012年5月	アレルギー 61(3-4), p. 556, 2012.	共同発表者：森谷利香、新井祐恵、池田七衣、九津見雅美、竹村節子 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 本調査では、複数のアレルギー疾患に罹患することがQOLに影響を及ぼすかどうかを検討することを目的として、大学生886人に対し、SF-8調査票、ESS、アレルギー疾患罹患状況を含むアンケート調査を実施した。有効回答855人。結果、半数以上の学生がなんらかのアレルギー疾患を有し、複数の疾患を合併している者が約25%であった。無疾患群とアレルギー疾患群においてPCS/MCSを比較すると、MCSでは両群に差は認められず、PCSにおいてはアレルギー疾患群で有意に低下していた。アレルギー疾患の合併の影響については、PCSでは単一疾患をもつ学生で最も低い値を示したのに対して、MCSでは合併の数が多くなるほど低下する傾向が見られた。学生においてアレルギー疾患を合併することで特に精神面のQOLに影響がでている様子があった。
32. アレルギー疾患が大学生の生活に与える影響	共	2012年5月	アレルギー 61(3-4), p. 552, 2012.	共同発表者：津田菜穂子、塩崎由梨、鈴木裕史、池田七衣、荻野敏 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 アレルギー性疾患の症状による日常生活へ与える影響の実態を知ることを目的とした。一般大学生に対し、2011年7月に質問紙の回答を得た。内容は、アレルギー性疾患症状の有無、SF-8、過去7日間にアレルギー性疾患の症状により勉強などにどのくらい影響を

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
33. 看護学生の清潔吸引演習時における「清潔」操作の実態	共	2012年2月	環境感染誌 27(Suppl)p. 307, 2012.	<p>受けたか、等である。有効回答数は232名。アレルギー性鼻炎有症率は39.5%、喘息5.6%、アトピー性皮膚炎5.2%。それぞれにおいて、ほとんどの下位尺度で有症者に比べ無症者の方がSF-8(QOL)値が高いという傾向があった。また、アレルギー性鼻炎のみを有する学生と比較し、他のアレルギー性疾患を合併している学生の方が、よりQOLが低いという傾向があった。</p> <p>共同発表者：池田七衣、津田菜穂子、鈴木裕史、塩崎由梨、荻野敏 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当</p> <p>本研究の目的は、看護学生の気管内吸引の演習における清潔操作の実態と、清潔操作に対する学生の自己評価を把握し、教育内容を再検討することである。A大学看護学部3年生を対象に自作の質問紙を用いた。内容は自身の清潔操作の評価や過去の清潔操作に関する経験等である。また、演習時の清潔操作時の手元をビデオ撮影し分析した。分析対象は45名。清潔吸引操作の自己評価について「難しかった」が97.8%であった。できなかった項目として回答割合の高い順に、「滅菌手袋を左手に装着する」「吸引チューブを一部開封する」であった。自由記載内容として「イメージがわかり難くやりにくい」との意見が得られた。清潔吸引操作は学生にとって「難しい」ものと認識されている現実がうかがえた。</p> <p>共同発表者：池田七衣、北尾良太、富澤理恵、新井祐恵 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当</p>
34. 歯ブラシへ付着させたStreptococcus sanguinisが減少する保管角度の検討	共	2012年2月	環境感染誌 27(Suppl)p. 244, 2012.	<p>歯ブラシを保管する角度と歯ブラシに付着する菌数の増減を調べ、歯ブラシへの付着菌数が最も減少する保管角度を検討することを目的とした。Streptococcus sanguinisの菌液に歯ブラシを投入し、菌を付着させた歯ブラシを0度(歯ブラシを横にし毛束を上にする)、90度(毛束を上にし歯ブラシを垂直に立てる)、180度(歯ブラシを横にし毛束を下にする)、270度(毛束を下にし歯ブラシを垂直に立てる)で6時間保管したのち、歯ブラシに残存している菌数を測定した。最も菌数が減少していたのは180度での保管であり、90度では菌数は減少、270度で増加した。0度での保管は毛束が上を向き、毛束下部に水分が残りやすく乾燥が妨げられ、残存菌数が多かったと考えられる。歯ブラシの乾燥と付着する菌数は並行関係にあることが示唆された。</p> <p>共同発表者：小村志保、藤田春子、塚本光、池田七衣、白井文恵、土肥義胤 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能</p>
35. 黄色ブドウ球菌を付着させたPETボトルの洗浄方法の検討	共	2012年2月	環境感染誌 27(Suppl)p. 245, 2012.	<p>一般家庭において実施可能なPETボトルの洗浄・消毒でPETボトル内に付着した細菌が除去できるのか検討することを目的とした。500ml PETボトル内に黄色ブドウ球菌を付着させ、水道水、生理食塩水、酢酸溶液、炭酸水素ナトリウム溶液、PETボトル用洗浄グッズ、中性洗剤溶液、次亜塩素酸ナトリウム溶液を用いて、洗浄・消毒後にPETボトル内に残存する菌数を測定した。黄色ブドウ球菌のPETボトル内残存率は、水道水による洗浄で77.8%、生理食塩水70.6%、酢酸溶液86.7%、炭酸水素ナトリウム溶液76.7%、PETボトル用洗浄グッズ16.9%、中性洗剤溶液9.1%、次亜塩素酸ナトリウム溶液1.2%であった。PETボトルの効果的な洗浄は中性洗剤溶液であったが、約9%の細菌は残存し、洗浄だけでは細菌を完全には除去できないことが明らかとなった。</p> <p>共同発表者：塚本光、小村志保、藤田春子、池田七衣、白井文恵、土肥義胤 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能</p>
36. アレルギー疾患が大学生の勉学へ与える影響—Stanford Presenteeism Scaleを用いて—	共	2012年11月	アレルギー 61(9-10), p. 1533, 2012.	<p>大学生の勉学への影響をアレルギー疾患と他の健康問題との間で比較することを目的とし、疾患非特異的尺度であるSPS(Stanford Presenteeism Scale)を用いた調査を行った。2012年5月と6月に大学生に対し、アレルギー疾患既往歴、SPSを含むアンケート調査を実施。有効回答290人。平均年齢は18.6歳で、今までに何らかのアレルギー疾患の既往のあるのは185人(64.7%)、うちアレルギー性鼻炎は156人であった。過去1か月間に何らかの健康上の問題があった学生は212人(72.9%)で、最も主要な不調として挙げられたのは、「アレルギーによる疾患」「腰痛または首の不調や肩こり」「うつ・不安感・イライラまたは情緒の不安定」であった。</p> <p>共同発表者：津田菜穂子、池田七衣、鈴木裕史、荻野敏 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能</p>

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
37. 看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究－第1報：模擬患者役の違いによる比較－	共	2012年11月	日本看護科学学会講演集 p. 398, 2012.	SP役の違い(A:一般男性、B:上級生)が演習効果にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的として、演習前後に質問紙調査を実施した。調査項目は、基本属性、コミュニケーション能力、学習意欲。分析対象者数はA70人、B80人であった。A,B共通して有意な変化が見られたのは、「患者の生活や個人的事情に関わる情報の聞き出し」「受診にいたる患者の受療行動や過去の対処行動の聞き出し」などの3項目で、学習意欲では、Bで「視線をあわせ、適切な姿勢・態度でいたか」等の5項目で有意に低下。SP役を上級生にしたことでは、次第に打ち解け、細かな看護技術の手技や対象者への対応について具体的なディスカッションが進んだ様子も伺えた。 共同発表者：九津見雅美、新井祐恵、森谷利香、池田七衣、竹村節子 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
38. 模擬患者を導入した演習による看護系大学生の学び-第2報 患者役の学び-	共	2012年11月	日本看護科学学会講演集 p. 339, 2012.	本研究の目的は、模擬患者 (SP) 役を経験した臨床実習終了後の学生の感想から学びの内容を抽出し、演習でのSP役が学生へどのような影響があるかを明らかにすることである。2011年9月の領域実習前のA大学看護学部3年生に、同実習終了後の4年生9名のSP役を導入した演習を行った。結果、6つのカテゴリー：『生きた情報をアセスメントする重要性』『患者役による自己の振り返りを通した学びと後輩への還元』『患者への心配りの大切さ』『ケアを円滑にするためのコミュニケーションの難しさと大切さ』『患者の個別性を踏まえた適切な看護技術の重要性の再認識』『患者役を通した患者の気持ちへの近づき』が生成された。SP役の学生は、実習中の患者の様々な反応とその対応を、SP役を通して後輩に伝える機会としていたことが窺えた。 共同発表者：新井祐恵、池田七衣、九津見雅美、竹村節子、森谷利香 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
39. 模擬患者を導入した演習による看護系大学生の学び -第3報：演習参加者の学びの特徴-	共	2012年11月	日本看護科学学会講演集 p. 339, 2012.	ロールプレイ演習における、患者役・看護師役の学びの特徴を考察することを目的とした。2011年9月、領域別実習開始前の看護学部3年生86名に、同実習終了後の4年生9名の模擬患者を導入した演習を行った。質的帰納的方法を用いた。看護師役からは『他者の存在を意識することによる自らの客観的再認識』『即応力への希求とその方法の模索』等のカテゴリーが、患者役からは『患者役を通しての自己の振り返りを通した気づきと後輩への還元』『患者への心配りの大切さ』等があった。両者の共通は、状況に応じて判断し、臨機応変に対応することの学びであった。異なる点は、3年生は実習という未知の体験への「不安」があり、領域別実習の準備として、より具体的な指導や、演習内容の評価のフィードバックが必要であると示唆された。 共同発表者：森谷利香、池田七衣、九津見雅美、竹村節子 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
40. 看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究 (第3報：模擬患者演習の効果の質的分析)	共	2011年7月	日本看護研究学会雑誌 34(3), p. 291, 2011.	模擬患者演習時に実施した質問紙調査の自由記載部分から、学生の学びを帰納的に分析・考察し、今後の課題を明らかにすることを目的とした。2010年9月A大学看護学部3年生80人を対象に、上級生が模擬患者となる演習を導入し、学習意欲・コミュニケーション能力の向上を目指した。分析対象は、質問紙自由記載部分に回答のあった77人。質的帰納的方法で分析した。結果、9のカテゴリーが生成され、『対象者から発信される声の実感』『内面の理解のためのコミュニケーションの訓練』『状況判断のための訓練』等であった。本演習は学習意欲とコミュニケーション能力について焦点をあてたものであり、コミュニケーションについてのカテゴリーが生成された。演習を通して、自らを客観的に捕らえ、自らを成長させる機会になっていることが推察された。 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当 共同発表者：池田七衣、森谷利香、九津見雅美、竹村節子
41. 看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究 (第1報：実態調査)	共	2011年7月	日本看護研究学会雑誌 34(3), p. 290, 2011.	臨時実習開始前の看護学部3年生を対象とし、演習前時点での学習意欲およびコミュニケーション能力の実態を明らかにすることを目的とした。質問紙の内容は、基本属性、学習意欲、コミュニケーション能力である。有効回答77名。看護の具体的な目標に向かっては学習する意欲が高かったが、看護という仕事の厳しさのイメージに関連しては意欲の低さがあり、学生の目標と現実との間の葛藤が学習意欲に影響し、コミュニケーションでは対象者に深く関わることが課題である様子があった。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
42. 看護系大学生の学習意欲とコミュニケーション能力に関する研究（第2報：模擬患者演習の効果の検証）	共	2011年7月	日本看護研究学会雑誌 34(3), p. 290, 2011.	共同発表者：森谷利香、九津見雅美、池田七衣、竹村節子 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 模擬患者（SP）演習前後の調査から、学習意欲およびコミュニケーション能力の変化を明らかにすることを目的とした。2010年9月にA大学看護学部3年生80人に質問紙調査（基本的属性、学習意欲、コミュニケーション能力）と180分のSP演習を実施した。SP演習は、臨地実習が開始される前の3年生前期に実施し、SPに看護技術の提供を課した。演習後得点が上昇したのは、学習意欲では「学習に非常に興味がわいてきた」「学習が難しすぎて理解できない（逆転）」等、コミュニケーションでは「患者の生活や個人的事情に関わる情報が聞き出せていたか」等の得点が低下した。学生らはコミュニケーションの難しさを実感しており、演習を継続する必要性が示唆された。 共同発表者：竹村節子、九津見雅美、森谷利香、池田七衣 本人担当部分：調査研究全般
43. 成人アレルギー性鼻炎患者はどのようなアレルギー疾患を有していたか？	共	2011年11月	アレルギー 60(9-10), p. 139, 2011.	高校生～成人アレルギー性鼻炎患者が過去にどのようなアレルギー疾患を有していたかを明らかにする目的で、大阪府内の開業医8施設の耳鼻咽喉科受診患者（15歳～30歳）にアンケートを実施した。鼻および眼症状の程度はほとんどが中等症以下であった。15歳以下での過去の調査結果と比較すると、アトピー性皮膚炎などの既往は同様の結果であったが、現在も合併しているかどうかでは15歳以下が10%程度であったのに対して、本結果では低い結果であった。 共同発表者：池田七衣、荻野敏、有本啓恵、入船盛弘、岩田伸子・菊守寛、竹田真理子、玉城晶子、馬場謙治、野瀬道宏 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当
44. Webサイトにおける花粉症情報提供－2003年と2004年の比較－	共	2005年6月	アレルギー 54(3-4), p. 383, 2005.	患者の情報源は、テレビ、ラジオ、新聞、テレホンサービス、インターネットサイトなどの多岐にわたる。そこで、このように診察を受けない患者の動態を調査することを目的とした。2003年および2004年の2月1日から4月30日までのスギ・ヒノキ花粉飛散期にインターネットサイトにて花粉症情報（花粉症の症状、発症メカニズム、花粉飛散予測、花粉飛散実測値）の提供を行なった。同時に実施したインターネットアンケート結果について2年の結果を比較検討し、花粉飛散量の少なさに関係したと思われるアンケート成績が得られた。 共同発表者：藤井つかさ、岩田伸子、有本啓恵、池田七衣、荻野敏 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
45. 一般開業医における小児アレルギー性鼻炎の実態	共	2005年3月	耳鼻咽喉科免疫アレルギー 23(2), p. 49-50, 2005.	耳鼻咽喉科を受診した小児アレルギー性鼻炎の現状を調査し、臨床症状と各種テストとの相関について検討することを目的とした。大阪府下の開業医10施設を対象とし、いずれかの施設を受診した15歳以下のアレルギー性鼻炎患者を対象にアンケート調査を行った。加えて、アレルギー検査、鼻汁検査、下鼻甲介の色調、誘発テストの有無、副鼻腔X-P, Allergic saluteの有無、Allergic shineの有無を実施し、検査の相関を検討した。結果、対象者数は155名で、男児の方が女児よりも多く、男児の方が低年齢の時に発症していた。家族歴は8割の患者に認められ、既往歴の主な疾患は、喘息が31%、アトピー性皮膚炎が28%だった。4分の3の症例で朝に悪化し、天候との関係はみられなかった。受診男女比や症状の日内変動の傾向において、大病院の調査結果と同様であった。 共同発表者：門田亜矢、池田七衣、荻野敏 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能
46. Webサイトにおける花粉症情報提供（第4報）－2003年と2004年の比較－	共	2005年3月	耳鼻咽喉科免疫アレルギー 23(2), p. 129-130, 2005.	Webサイトを利用し、受診しない患者を含めた花粉症患者の実態を把握し、花粉飛散量による影響を検討することを目的とした。2003年及び2004年の2月1日から5月30日までのスギ、ヒノキ花粉飛散期にインターネットにて花粉症情報（症状、発症メカニズム、花粉飛散予測、花粉飛散実測値）の提供を行い、同時にインターネットアンケート調査を実施した。2003年の花粉飛散実測値は東京品川区で3932個/cm ² 、2004年は433.5個/cm ² であった。サイトへのアクセス数は2003年が348045件、2004年は34862件であった。結果、2003年には半数以上の方が、現在の症状が「昨年より重い」もしくは「昨年と同様」と回答し、薬の服用期間について、2003年に比較して2004年は「1週間未満が多く、花粉飛散量の減少に比例して、アクセス数の減少、症状の軽さが示唆された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
47. スギ花粉飛散量に伴うスギ特異的IgE抗体価の年次変化	共	2004年3月	耳鼻咽喉科免疫アレルギー 22(2), p. 128-129, 2004.	共同発表者：池田七衣、門田亜矢、荻野敏 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当 花粉大量飛散の翌年に花粉量が減少すると、その後の患者の感作状態にどのような影響を及ぼすのか、花粉量の変動によるIgE スコアの変動を調べることを目的とした。2001～2003年の3カ年、スギ特異的IgE抗体価を測定した。対象者73名。結果、2001年の1月に特異的IgE スコアが陰性だった人のうち、花粉の大量曝露によって2002年1月の値で陽性を示し、翌年の花粉曝露量の減少により2003年1月の値で再び陰性化した症例が5例みられた。花粉症の診断には、1回だけの抗体価測定だけではなく、発症期間、症状の程度を観察することが重要であり、年ごとに変化する抗原の種類、量などを常に念頭におき、必要に応じ経時的な抗体価測定も行っていく必要があることが示唆された。
48. Webサイトにおける花粉症情報提供(第3報)ー地域と初期治療ー	共	2004年11月	アレルギー 53(8-9), p. 975, 2004.	共同発表者：池田七衣、吉場暁子、荻野敏 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当 患者が情報の収集源として容易に用いることのできるWebサイトを利用し花粉症についての情報提供を行い、アンケート調査を行うことで、受診しない患者を含めた花粉症患者の実態を把握し、受療行動の地域特性について検討することを目的とした。2003年の2月から4月まで行ったWebサイトにおけるアンケート調査結果から、初期治療の有無に男女差はみとめられなかったが、若年者ほど症状発症後の受診が多く、40歳以上は39歳以下に比べ有意に初期治療が多かった。また東日本が西日本に比べ、大都市が地方都市に比べ有意に初期治療が多かった。これら受診パターンの相違を患者指導に生かす必要があることが示唆された。
49. 細菌の頭髮への接着と洗淨	共	2003年11月	第56回日本細菌学会 関西支部総会予稿集 p. 37, 2003.	共同発表者：池田七衣、有本啓恵、岩田伸子、荻野敏 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当 院内感染の主な原因菌である黄色ブドウ球菌および緑膿菌の頭髮への接着状況と水洗およびシャンプーによる洗淨の効果について検討することを目的とした。細菌を一度頭髮に接着させ、洗淨することによって頭髮からどのくらいはずれるのかを実験検討した。結果、一度頭髮に接着した菌の約77%が流水のみの洗淨後は頭髮に残存しているが明らかになった。また、シャンプー処理を加えても、約10%の細菌が残存することが明らかとなった。
50. 抗酸菌の末梢血単球内増殖に及ぼすサイトカインの影響	共	2003年11月	第56回日本細菌学会 関西支部総会予稿集p. 2 5, 2003.	共同発表者：池田七衣、白井文恵、土肥義胤 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当 単球が、BCG菌を食菌する効率とその作用を増減させるサイトカインの働きの実態を明らかにすることを目的とした。健康人の単球が、BCG菌を食菌する効率は著しく幅があり個人差が大きいこと、IL-10の添加により食菌数も減少することが明らかになった。また、単球内ではBCG菌は増加するが、GM-CSFで分化させたマクロファージ内では減少した。単球、マクロファージいずれの場合でもIFN- γ の添加によりBCG菌の増殖は阻止された。さらに、IL-10を添加した場合BCG菌は増殖した。いずれの効果もマクロファージの方が単球より著しかった。また、IL-10は単球/マクロファージ内でのBCG菌殺菌能力を低下させ、IFN- γ をさらに作用させても殺菌能力の回復はみられないことから、結核患者の発病阻止や、IL-10の作用を介助させることがカギになると示唆された。
51. 黄色ブドウ球菌及び緑膿菌の頭髮への接着性について	共	2003年1月	第3回日本感染看護学会 学術集会 2003	共同発表者：池田七衣、土肥義胤、白井文恵 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能 院内感染の原因となる細菌が伝播される媒体のひとつと考えられる頭髮に着目し、その細菌伝播の可能性を定量的に明らかにすることを目的とした。黄色ブドウ球菌及び緑膿菌を使用し、シャンプー処理、リンス処理、トリートメント処理した頭髮にどの程度の菌が接着するのかを算出した。結果、それぞれの頭髮に対する接着性には有意差はないものの、いずれの頭髮にも菌が十分に接着することが明らかとなった。
52. セラチア菌の衣服繊維素材への接着性について	共	2003年1月	第3回日本感染看護学会 学術集会 p. 44-45, 2003.	共同発表者：池田七衣、土肥義胤、白井文恵 本人担当部分：調査研究全般、発表を担当。 セラチア菌による院内での集団感染が問題となっている。感染防止のため、セラチア菌(院内感染者分離株4株、環境分離株4株)の衣服繊維素材への接着を調べた。セラチア菌はアクリルとポリエステルにはよく接着するが、木綿、ナイロンへの接着性は低

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
53. 活動性結核患者の末梢血単球のNO産生能の低下	共	2003年1月	第3回日本感染看護学会学術集会講演集 p. 42-43, 2003.	<p>かった。伝搬防止には木綿、ナイロン素材が好ましいことが明らかになった。 共同発表者：高島真美、白井文恵、池田七衣、土肥義胤 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能</p> <p>単球が、BCG菌を食菌する効率とその作用を増減させるサイトカインの働きについて、健康人と結核病者における差異を明らかにすることを目的とした。活動性肺結核患者及び健康成人の末梢血単球を精製し、IFN-γを添加しても非添加時と同量のNOしか産生しなかった。このことは、肺結核患者の単球が単球活性化因子であるIFN-γにより、iNOSを誘導しないことを示唆している。肺結核患者の単球はIFN-γに対する応答性の低下によるNO産生の低下により単球内に存在する結核菌の殺菌能力をさげ、結核発病を許していることが示唆された。また、健康人でも加齢により単球のIFN-γに対する応答性が低下している傾向がみられた。 共同発表者：白井文恵、高島真美、池田七衣、土肥義胤 本人担当部分：共同研究につき、抽出不可能</p>
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 社会人基礎力育成を目指した看護教育の開発	共	2015年～	学内助成金：教育改善・改革プラン採択事業	<p>看護職者として社会に出る際に必要となる社会人基礎力を向上させ、大学での学修と臨床現場のギャップの大きさゆえの早期離職が減らない看護界の現状を改善できようことを大目標とし、4ヵ年における看護教育課程の中で、アクティブラーニングを積極的に導入した授業展開を意識し、随時学生の成長と授業運営を客観的に評価改善し、大目標に繋がる看護教育を考察することを目標とした研究である。</p> <p>研究代表者：宮嶋正子 研究分担者：池田七衣、藤本かおり、平野方子</p>
2. 成人アレルギーエドゥケーター養成に向けた基礎的研究	共	2014年～	課題番号：26463330 科学研究費補助金 基盤研究C	<p>成人アレルギーエドゥケーターの養成プログラムを構築し、実施・評価することを最終目標とし、その基礎的研究としてアレルギー患者の自己管理行動の実態と自己管理継続に向けて教育的に関わる看護者へのニーズや期待度、思いを明らかにすること。アレルギー患者に関わる看護師に対して、アレルギー疾患看護に対する関心度、患者の自己管理継続に向けて教育的に関わる看護の必要性についての認識や思いを明らかにすること、これらを踏まえ、アレルギーエドゥケーターとしての看護職の専門家を養成する上での課題を明確にすることを目標とした研究である。 研究代表者：山中純瑚 研究分担者：池田七衣</p>
学会及び社会における活動等				
年月日	事項			